

を申し入れてきたが、こちらのほうは、規律正しく、部下も伊庭・人見の命命をよく聞くといたたもので、真の忠義を見た忠崇は、一纏に戦うことを固く約束した。この時に諸西の佐幕論は決定的なものとなったといっている。

閏四月三日、諸西の真武根陣屋から諸西藩士七〇名、遊撃隊三六名が出陣した。なお、忠崇は脱藩した身分だった。後年、藩主脱藩の理由を「脱藩しないと慶喜公と示し合わせて挙兵したことになる。脱藩しておれば浮浪人だから誰に命令されようもない」と語っている。恩のある徳川家には迷惑がかからぬよう配慮した、二十一歳の青年藩主の心意気を示している。

忠崇・遊撃隊の連合軍は、まず富津に赴き、佐賀、勝山を通り、同月九日、そこから船で伊豆の真鶴をめざした。忠崇らは江戸への交通路の要である箱根を押しさえよとしたのだ。

同日、諸西藩士である諏訪教馬が館山で死亡している。病弱で出陣できなかつたのを苦にしての自害であった。墓は館山市来福寺にある。

すでに奥州にも新政府軍の兵が続々とやって来る。

十七日、関田宿で戦闘を開始、忠崇は仙台・平・相馬の連合軍とともに新政府軍と戦うが、すでに世情からも無駄な勝利を感じ取っていた連合軍に、潮気が上がるはずもなく、形勢不利となると、退却を始める者も出てきた。忠崇は馬上から、踏みとどまるよう命令をするが、もはや聞く者もいなかった。

忠崇は、ここで討死を思ったが、諸西から同行していた老臣北爪貞に諷められ、転戦を決意する。二十八日に新田坂の戦闘にも加わっているが、平落城前の二十九日に当地を離れ、会津へと向かう。

が、忠崇をはじめとして疲労の色も濃く、とりあえず、ここは相馬へ行くことになった。忠崇に従う者、わずかに六九



諏訪教馬の墓(館山市来福寺)

請西藩は藩主自らが兵を率いて、新政府軍と戦った結果、その所領のすべてを没収されてしまった藩である。戊辰戦争後、滅封された藩は、いくつもあるが、なにもかも失ったのは諸西だけであつた。江戸屋敷にあつた藩主の林昌之助忠崇が、領地の諸西へ帰藩したのは慶応四年三月八日のことであつた。藩内では旧幕派と恭順派が論議をかわしていたが、もともと佐幕論の強い藩であつたらしく、忠崇も「徳川大軍」の心があつたので、自然、藩士たちも、そちらに傾いたらしい。

そうするうちに、四月十七日、幕府の有志からなる撤兵隊が諸西にやって来、協力を求めてきたが、この撤兵隊は領民に対して暴行を加えたり、金品の強要をしたりとはなはだ素行が悪かつた。生真面目な忠崇は徳川のために徹底抗戦をしたいが、撤兵隊の申し出には躊躇した。

が、それから数日後の二十八日、今度伊庭八郎、人見勝太郎率いる旧幕府遊撃隊が諸西を訪れた。やはり戦いの協力

加勢するものはいないも同然であつた。もちろん、新政府軍も黙っていない。問罪軍を仕立てて、即刻、小田原に赴き、小田原藩を忠崇らとの戦いの最前線部隊とした。問罪軍は後方において、小田原藩の形勢が不利になったら出て行くといふかたちをとつたのだ。

いったんは諸西・遊撃連合軍に協力的になつた小田原藩に裏切られ、五月二十六日、箱根山崎で激しい戦争となつた。最初、劣勢だつた小田原側も新政府軍の参入をもつて優勢にまわってくる。この時、遊撃隊の伊庭八郎が三枚橋で重傷を負う。

翌二十七日、忠崇たちは、これ以上戦うことは無理とし、退却を始める。まず熱海に出、網代から榎本武揚の艦隊に乗り込み、海路、館山へ向かつた。

忠崇は榎本武揚の奥州行きに賛同し、二十八日、生き残つた諸西・遊撃隊連合軍とともに咸臨丸に乗り、奥州をめざした。が、重傷を負つた伊庭は、療養のため、品川に留まつた。

六月一日、小名浜着。四日には湯本へ進み、五日、岩城の平に入る。しかし、

# 二百五 戊辰戦争事案 (打つて来た)

請西藩 (譜代)

陣屋 千葉県木更津市  
領地 上総国望陀郡諸西  
石高 一万石  
席次 菊間詰  
家紋 三巴に二文字紋

ところで、箱根の関所は譜代の小田原藩が警固をしていた。そこで、まず小田原藩に援軍を要請すべく、十一日、忠崇自らがわずかな家臣とともに説得に向かつた。

が、小田原ではすでに恭順の考えに流されており、忠崇たちの願いは激えた。十五日に徳川願願の韮山藩にも出向いたが、こちらでも同じ結果だつた。

その後、三島、御殿場を通過して、五月一日、甲府に到着する。甲府は徳川の大領であるし、沼津藩主水野忠敬と図つて徳川再興をもくろんで見たが、もはや甲府も新政府軍のものとなつており、忠崇らの計画はまたも頓挫、箱根方面へ引き返すことになつた。

館山藩や飯野藩からの参加を含めて二七〇余名となつた諸西・遊撃隊の連合軍は同月十九日、三島に着く。すでに先行していた人見勝太郎の軍が、箱根関門で警固の小田原藩士と戦いを始めており、本隊もすぐ応援、二十日、これに勝利し、小田原藩士を味方に得ている。

しかし、すでに江戸では彰義隊が上野で敗れており、関東周辺には忠崇たちに

名、それでもなお忠崇は大恩ある徳川家のため、戦う気概を失つてはいなかった。

福島、二本松を経て、七月二十三日、会津に入った。このころ、すでに二度ほど仙台から使者が忠崇のもとにやってくる。仙台藩の伊達慶邦から仙台に来るよりにこのことであつたが、忠崇は、これを断つている。とにかく徳川最後の要は会津であるという信念があつたのだろう。

しかし、その遣いが三度目、それも藩主自らの親書を携えてのものに、仙台入りを決意、八月五日に会津を出立、十二日、岩沼城に出陣中の伊達氏に面会し、会津の危機を救うべく評議しているが、どうやらよい結果は得られなかつたようで、今度は米沢藩へ赴くことになった。が、どこでも自藩大事の態度は変わらない。続々と新政府軍に恭順していくなか、忠崇は最後まで戦うつもりではいたが、九月二十三日、会津落城の報を聞き、ついに十月三日、忠崇は仙台で降伏、東京へ護送されることになる。

これをもつて諸西藩の戊辰戦争は終結するが、それは同時に諸西藩の終焉をも意味していた。

なお、諸西藩の戦死者であるが、秋子松五郎、小倉由次郎、大野静(箱根・興徳院に墓)、重田信次郎、篠原九寸太、清水半七、西森与助、広部与惣治、政田謙蔵(箱根・本蓮寺に墓)が箱根で死亡している。また杉浦鉄太郎、高橋謨、檜山省吾、吉田柳助、大野裕十郎が磐城新田山で戦死。北爪貢は慶応四年九月二日に上野利根川村で捕らえられ、斬殺されたというが、仙台で降伏後に病死とも伝わる。

ほかに木村嘉七郎、小倉喜三郎、小倉鑑三太、大野友弥が降伏後、病死している。(今川 美彦)

### おだき 大多喜藩 (譜代)

居城 千葉県東陽郡大多喜町  
領地 上総国夷隅郡大多喜  
石高 二万石  
席次 雁間詰  
家紋 三扇の丸紋  
開戦時の藩主 大河内正質

藩主の大河内正質は、大政奉還後に老中格に任命され、討薩のきっかけとなつた慶応三年十二月二十五日の薩摩藩邸焼き打ち事件では、浪士討伐を命じる立場にあつた。

慶応四年一月三日に鳥羽伏見の戦いが起こると、正質は一小隊四〇名を率いて淀本營で指揮をとり、若年奇並竹中重固、塚原昌義とともに、作戦立案上、重要な役目を担つた。翌日、前將軍徳川慶喜は三名あてに七、八分の勝利と聞いて満足の色を表す沙汰書を出している。

しかし、戦況が悪化すると、慶喜は大坂脱出を決意し、直書によつて三名に残留を命じた。慶喜らが去つた七日、正質は大坂在城諸隊を解散させた。

正質らは、「徳川慶喜反逆ヲ相助ケ候重罪」と朝廷に見なされていたので、十日には慶喜ら二七名とともに官位が剝奪され、邸地は没収された(『東征總略記』)。さらに二月九日には旧幕府より老中格を免ぜられた。

鳥羽伏見の戦いで勝利を収めた新政府軍は、東征軍を編制して江戸に入ると、房総鎮撫にも乗り出した。閏四月四日、千住宿を発つた東海道先鋒副總督柳原前光は、七日に佐倉城に入城した。佐倉藩は態度が曖昧だったため、大多喜征伐を率先して行うことで、勤王の旗幟を鮮明にするためだつた。九日、恭順した佐倉藩兵を含め、総勢二〇〇〇名ともいわれる新政府軍は大多喜をめざして出陣した。

一方、抗戦する意思がない大多喜藩は、藩主正質が菩提寺の円照寺で謹慎したことをはじめに、鳥羽伏見の戦いに参戦した家臣二九名と殿兵二〇名も東長寺で謹慎した。

十一日に茂原を出発して長南に到着

した新政府軍は、軍使の安場一平をもつて大多喜藩に降伏勧告の文書を出した。内容は、藩主を佐倉藩に預けること、開城して地図や武器を差し出すこと、家臣は寺院に謹慎することなどだつた。これに対し翌朝、大多喜藩家老可児治太夫は承諾の請書を出した。新政府軍の進軍に大多喜城下は騒然とし、各家戸を閉め、洲谷へ一時、避難する領民も多かつたという。

十二日正午ごろ、追手門より柳原前光らが入城して大多喜城明け渡しの文書が手渡され、同日中に武器や地図類、家中姓名録などが接収された。藩主正質は佐倉藩の竹矢来をめぐらした城中侍屋敷に拘禁され、領地は大河内宗家の三河吉田藩の管理下に置かれた。

鎮撫の目的を果たした新政府軍は、布告書を出して大多喜藩の領民を慰撫したのち、二十日から引き揚げを開始した。

藩主正質は、家臣や領民の赦度になたせる赦免嘆願の甲斐あつて、八月十九日に罪が許され、領地も返還された。

恭順した大多喜藩は、その後、箱館出兵を命じられたが、九月に中止されて東京駐屯になり、十月の明治天皇の東京行幸にさいしては、花房藩とともに沿路を警備した。(清水 理繪)